

# Wesley Hall News

第79号 2004年3月5日 発行 青山学院宗教センター(ダイヤルイン03-3409-6537) 編集 ウエスレー・ホール・ニュース編集委員会



2002年度 初等部卒業式

## 目 次 ( 特集 : 卒 業 )

○ 説教 「聖なる体験」 ..... 大庭 昭博	2	○ キリスト教図書紹介 ..... 清水 正	9	
○「思い出四つ」 ..... 鈴木 有郷	4	○ 相模原キャンパスのキリスト教活動を振り返って 一地の塩 世の光としてー	大島 力	10
○ 特集 神さまとともに生きる ..... 石松 隆子	6	○ 青山学院資料センター所蔵のキリスト教 貴重文献・史料 その6	氣賀 健生	12
○ 特集 五つの約束を胸に ..... 橋本 治奈	6	○ 私の教会 ..... 横山 道行	14	
○ 特集 やった！サヨナラ勝ちだ！優勝だ！ ..... 鵜飼 佑	7	○ 宗教センターだより ..... 15		
○ 特集 オルガン部に在籍して ..... 中川 葉音	7			
○ 特集 メッセージ ..... 中尾 彩子	8			
○ 特集 出会い ..... 馬越 嶺	8			

## 説 教

# 「聖なる体験」 列王記上 第19章1—13節

大庭 昭博



古代から宗教と民族は密接な関係にあった。宗教が、民族という特殊な核から出発し、普遍的な価値を求めるとするならば、民族主義と普遍主義はいつも緊張関係の中に置かれていることになる。キリスト教は民族主義的なユダヤ教を母胎とし、イスラム教を含めアブラハムの兄弟宗教である。民族間の平和もそのような緊張関係の中にある。現代では民族と同様、平和もイメージしづらくなつていよう。平和の対極に戦争を置いて、平和を戦争のない状態と理解するのは、一面的にすぎない。そういう状態だけが平和とは言い切れないからである。戦争となる原因は、種々の要因が錯綜しており、政治、経済、文化、宗教といったような複合的な要素があるので、たとえば、イラク戦争をキリスト教とイスラム教の戦争ととらえることは正しくない。

平和を語る際に、よくパックス・アメリカーナ（アメリカの平和）という言葉が使われる。これは、古代のパックス・ロマーナ（ローマの平和）からきた言葉である。そしてこのパックス・アメリカーナは、パックス・エコノミカ（経済の平和）という特徴をおびている。しかし、「平和」は文化の異なるところでは、意味も違つてくる。古代においては、「平和」は他の諸民族との平和的共存を意味するものではなかった。敵を屈服させること、他の国々の平定を意味した。イバン・イリッチ『暴力としての開発』によれば、「パックス」は、「条約」の締結と語源を同じくする。したがつて、「ローマの平和」とは、古代のローマ帝国のひとつのイデオロギーであり、ローマの法的な諸条件を敵に強制することであった。「アメリカの平和」というのも、アメリカの秩序を強制することとみなしてよいであろう。民主主義の輸

出という思い上がりもこのことに根ざしている。それに対して、イバン・イリッチは、「民衆の平和」を対置する。

「民衆の平和」から考えると、平和とは戦争がないことではなく、戦争のもたらす暴力から、ふつうの人々が自分たちの特有な文化を維持していくのに必要な、最低限の物質的・精神的な基盤ということになる。この民衆の立場からアフガニスタンで医療活動を続けるペシャワール会の中村哲医師は、自衛隊の海外派遣がいかにイラクの民衆の平和を無視しているか、アメリカばかりに目を向け、文化の異なるイスラム社会の信用をどれだけ失ってしまうことになるのか、ある講演会で深い憂慮を込めて語り、自衛隊派遣を決めた日本の政治的指導者は「国賊ものだ」とさえ言い切っていた。この政治決定を容認する精神的風土が、戦前・戦中のように、あえてそのことに異を唱えると「非国民」呼ばわりされる時代がもうそこまで来ているということであろうか。イラクの人々にとって、アメリカのユートピアや計画をあらかじめ設定して、その枠に嵌められることなど有難た迷惑である。平和を求めることは、自分たちの文化や慣習を大切にしつつ、ふつうの生活に戻りたいということではないだろうか。

古代ローマ支配下の「平和」が、ローマの法と秩序を押しつけることであったのに対して、民族宗教のユダヤ教内では様々な立場が生まれることになった。ローマの構造的支配に対して、武力による民族解放運動へ社会を巻き込むグループがあり、他方あくまでも外交的努力によって自らの宗教的アイデンティティを維持しようとする宗派もあった。どちらも、自らの固有な文化、慣習を守る民族宗教的で

あつたことには変わりはなかつた。大雑把な図式化がゆるされるとするならば、前者が他の民族を排除することによって自らの民族性を維持しようとするのに対して、後者は、他の民族にも妥当するような普遍性によって独自性を求める立場と言えるであろうか。ユダヤ教は、この民族主義がどのようにして普遍性を生み出すのか、民族的苦難の中で繰り返し試されてきた。そのプロセスのひとつを、預言者エリヤの姿に見てみよう。

列王記上19章の記事は、エリヤが権力の追手から神の山ホレブへ逃れ、そこで神顕現を体験するという内容である。権力とは、イスラエルの王が神やハウエによって立てられたにもかかわらず、異国から王妃を迎える、その王妃が自国の神を伝道するためには、イスラエルの預言者達を圧迫した権力のことである。この権力と結びついたのが自然宗教の神バアルであった。宗教戦争と言えなくもない。しかし基本的には権力の宗教と、古代の奴隸制を前提としつつも民衆の宗教と言ってもよいであろう。権力と結びつきやすい自然宗教と、人々の権利を保護する歴史宗教の対決である。

エリヤはバアルの預言者達とカルメル山で対決し、劇的な仕方で勝利を収めた。当然の結果として権力から追われる立場になる。だから命からがらで神の山へ逃れてきたのであつた。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください」と神に願うほど疲れ切っていた。四十日四十夜歩き続けてホレブにたどり着いたことは、エジプトの奴隸状態から民を導き出した指導者モーセが範例とされている。神はモーセの場合と同じように、そこで「通り過ぎる」ことでしか姿を現されなかつた。まず「激しい風」、次いで「地震」そして「火」が起ころ。しかしそこに神はおられなかつた。自然が神でないという、自然宗教の厳しい否定である。旧約聖書では、自然はあくまでも神が創られたものであり、神は自然の中ではなく、歴史を通して人間を導かれる神である。ここでエリヤは、モーセが神の後姿を見たにすぎないよう、「静かにささやく」神の声を聞くだけである。父

祖からの民族主義的な刻印が押されている宗教に対して「熱心」であったエリヤは挫折する。ナボトのぶどう畠事件（21章）で見られるように、確かにエリヤは、人々を圧迫するバアル宗教ではなく、人々の権利を擁護するヤハウエ宗教の預言者であった。と同時に、その行為は、民族主義的な色彩の濃い「熱心」にとらわれている。この「熱心」は挫折する。人々の権利を擁護するという点において、普遍的な価値を体現しているのと同時に、父祖から受け継いだ異教徒、異民族を排除する「熱心」は挫折してしまつたのである。その挫折のときに聞こえてくるのが「静かにささやく」神の声であった。これがエリヤの「聖なる体験」であった。

人間が歴史の指導者や預言者として選ばれるとき、旧約聖書では人間的な自然の感情はいったん否定される。モーセも、「わたしは口の重い人間でとても人々を導く器ではありません」とその選びを何度も断っている。エリヤの場合は「自分は先祖にまさる者ではありません」と人間の自然的な感情を吐露している。このような時にこそ、人間は「聖なる体験」をさせられる。この聖なる体験は、後の預言者達によって、より普遍性をあらわしていく。しかし、後の新約聖書の時代において、この「熱心」は、民族主義と結びつき、ローマに対する民族解放運動を生み出した。その時代にイエスは、武力を否定する「平和の福音」を説かれている。

神は民族を否定されているのではない。異質な他者を排除する狭い民族主義を挫折させることによって、より普遍的な「平和」を、神の歴史を通して示されようとする。しかし、その歴史が人間によって担われる以上、そこには「聖なる体験」が必要であった。熱心にとらわれる人間そのものが否定されるわけではないからである。エリヤにとってそれは、絶望の淵に突き落とされたときに聞こえる神の静かなささやきであった。この聖なる体験のない人間の驕りは、真の平和を創り出すことはできないであろう。

（大学宗教主任）

# 思　い　出　四　つ

鈴　木　有　郷



30年前私はキリスト教学担当の専任講師として青山学院女子短期大学に赴任しました。それ以降、創設時の恵泉女学園大学で教鞭を取った時期以外は青山学院で働かせて頂いたことになります。宣教師として、宗教主任として、教員として、多くの貴重な体験をすることができました。その中でも特に心に残っている生徒や学生の思い出を四つ、思い出すままに記させていただきます。

## 思　い　出　一　つ

私の息子が幼稚園に通っていた頃ですから20年以上前のことです。土曜日は子供をお世話になっていた原宿教会幼稚園に迎えに行くのが私の役目でした。途中の道で時々顔を合わせる女の子がいました。名前は知りませんでしたが、青山キャンパスで時々見かけていたので、青山学院の中等部の生徒であることは分かっていました。彼女も私が青山学院の関係者であることは知っていたようです。道で会えばお互いに笑みを交わし、目礼するのが常でした。

ある土曜日私と息子はKちゃんとKちゃんのお母さんと一緒に家路につきました。私には一つの気掛かりなことがありました。帰り道に大通りを横断しなければならないのですが、Kちゃんは生まれつき足が不自由でいつも松葉づえをついていたのです。普通の子供でさえ小走りに走らなければ間に合わないので、Kちゃん大丈夫かなという心配が私にはありました。案の定、大通りを半分くらい行つたところで信号は変わり始め、私の心配は現実となりました。悪いことは重なるもので、Kちゃんの靴の紐がとけたらしく、彼は道のまん中に座り込んで一生懸命結び始めたのです。私はあせり、一瞬Kちゃんを抱きかかえて走ろうと思いました。しかしKちゃんのお母さんは彼の後ろに立ってじっとKちゃんの手許を見つめているのです。私は一瞬にして気づきました。お母さんは息子さんを自分でできることは自分でする独立心旺盛な子供に育てようとしており、

彼女の毅然とした態度はその教育方針の現れだったのです。私はお母さんと並んでKちゃんの後ろに立ちました。

しかし信号は待ってくれません。色は黄色に変わり、瞬く間に赤になりました。車は私達に向かって洪水のように押し寄せて来ました。私達に向けてかしましくクラクションが鳴り響きました。一台の車は前部を私の腰に押し付け、「じゃまだ、早く行け」という風に急かす始末です。やっと渡り切った私達を待っていたのは、通行人の冷たい視線でした。「何やってんだ。迷惑だろう」という罵声を聞いたような気持ちになり、私は暗たんたる気持ちになりました。その時一人の少女が私達の前に現れ、ぴょこんとお辞儀をしました。あの中等部の生徒でした。彼女の言葉を聞き取ることができませんでしたが、口の形からして「頑張ってください」と言ってくれたのだと思いました。あの人間らしさを忘れた通行人に対して、彼女は私達を背に大手を広げて立ち向かってくれたのです。誰にぶつけといいか分からない怒りを覚えていた私に彼女は癒しと慰めを与えてくれました。

## 思　い　出　二　つ

80年代の中頃、「ビルマの豊饒」이라는 영화가 상영され、人々의 관심을 모았습니다. 저는 휴식을 이용해 읽기 회를 열어 영화 원작인 竹山道雄이 쓴『ビルマの豊饒』을 소개했습니다.

御存知の方も多いと思いますが、本書はあの悲惨な太平洋戦争の中でヒューマニズムに目覚めて行く主人公水島上等兵と戦友の心の動きを描いたもので、反戦文学の白眉と呼ばれています。物語は、水島上等兵が「一緒に日本に帰ろう」という戦友の呼びかけに背を向けて、一人ビルマの僧侶として戦死した日本兵の骨を拾って歩くことに生涯を捧げる決心をするところでクライマックスに達します。その場面は感動的で読者の涙をさそいます。

一人の短大の学生が感想を述べてくれました。あの戦争で死んでいった人達の多くはビルマの民衆であった。その他に、国際連合軍のインドの兵隊も、イギリスの兵隊も、オーストラリアの兵隊も、ニュージーランドの兵隊も大勢死んでいた。反戦思想に目覚めた水島上等兵の意識にあつた人々は日本兵だけであつて、他国の人々ではない。彼のヒューマニズムには何か大切なものが欠けているのではないか。

私はこのような鋭い問いを発する学生と出会えたことを心から幸いに思います。ヒューマニズムは、民族的枠組みや文化的制約を越える視点を持たない限り真の普遍性を持ち続けることができないという真理を彼女は私に教えてくれたのです。彼女の問題提起はキリスト教を考える上でも、日本を考える上でも不可欠な洞察を与えてくれました。

### 思い出三つ

友人のアメリカの日系人から一通の便りがありました。自分の娘が日本に一年間留学するので目をかけてやってほしい、というものでした。彼女は前半の半年をI.C.U.で、後半の半年を上智で勉強しました。日本に着いて間もなく9月のある日、彼女は私の自宅を訪ねてくれることになりました。三鷹から渋谷に着いたらはいいが、どのバスに乗ってよいやら見当もつかず、困り抜いてしまいました。

私の友人の娘さんは、アメリカの大学で日本語を2年程勉強していましたが、その日本語は決して十分なものではありません。「青い目の外人さん」には親切な人も、外見は普通の日本人と全く変わらない、しかし日本語は片言の日系人は奇妙な存在であるらしく、ほとんどの人が相手にしてくれなかつたようです。

絶望的な気分になっていた彼女に声をかけてくれた二人の女子学生がいました。彼らは彼女の行く先を確かめると、正しいバス乗り場に連れて行ってくれました。バスがまだ来ていないのを見ると、バスが来るまで待ってくれ、運転手に降りる駅を告げ、着いたら声をかけてくれるように頼んでくれたそうです。バスを待つ中、二人が青山学院大学の学生であり、その一人は私のキリスト教概論を、もう一人は「キリスト教政治倫理」を取ったということも分かり、一段と話が弾んだそうです。

困っている人を目にしてその人に自ら近づいて行き、相手の必要とするものを自分のできる範囲で何のてらいもな

く差し出す若者を教えることのできた幸せを私は噛みしめたことでした。

### 思い出四つ

私はこの数年間、緑内障という厄介な眼病に悩まされています。昨年の12月、精密検査と治療方法の確立のために検査入院をし、一週間の休講を余儀なくされました。昔だったら休講の知らせは喝采を喚起し、拍手で迎えられたでしょう。しかし、私が担当した6つのクラスはすべてしんと静まり返り、心配そうな顔だけが私の前に並んでいました。何人もの学生が、自分の母が、祖母が、親戚が同じ病気にかかっているけれど、正しい治療法に従えば進行を防ぐことは可能なのだと知らせてくれ、私を元気づけてくれました。「だから先生、頑張ってください」という彼らの言葉を、私はどんなに嬉しい思いで聞いたことでしょう。

他者の痛みを、自分は痛くないにも関わらず想像力を駆使して自分のもののように感じ、その痛みを少しでも柔らげようとする若者達がいることを私は体験的事実として知ることができました。

私の脳裏に刻み付けられて離れないこれらの若者達は、現在の日本が、そして世界が最も必要としている人材だと私は信じて疑いません。

そのような人間を育て、世の中に送り出している青山学院に幸あれ。

「神ともにいまして  
ゆく道をまもり、  
あめの御糧もて、ちからをあたえませ。

荒野をゆくときも  
あらし吹くときも  
ゆくてをしめして、たえずみちびきませ。

御門に入る日まで  
いつくしみひろき  
みづばさのかげに、たえずはぐくみませ。

また会う日まで、また会う日まで  
神の守り、汝が身を離れざれ。」

(宣教師・大学宗教主任)

---

## 特集：卒業（幼稚園）

### 神さまとともに 生きる

石松 隆子



三学期最初の深町先生の聖書のお話は、「イエスはまことの葡萄の木」の箇所でした。いよいよ卒園の日が近づき、一分でも一秒でも無駄にすることなく大切にこの幼稚園の空気を吸っていたいと切実に願う今日この頃です。娘が入園し早三年の月日がたとうとしています。娘は「わたしにつながっていなさい。」という主の教え通りに強固にイエス様に結ばれた三年間でした。娘に、祈りを通して、遊びを通して、お友達を通して、自然との触合いを通して数えきれないほどの神様との出会いを与えて下さいました先生方に心より感謝致します。価値観が多様化し、不安定な社会状勢の中で、娘は幾つもの逆境を乗り越えて行かねばならないことでしょう。神様に愛され生かされているという確固たる自信は、きっとどんな時にも娘を奮い立たせてくれると確信致します。

私は、カトリックの信者ですが、仕事に埋没し、仕事中心の生活を送っておりました。娘の幼稚園入園は、私にとりましても人生の大きな転機であり、未熟な信仰生活を省みるものでした。カトリックの典礼聖歌に「小さな人々の一人一人を見守ろう。一人一人の中にキリストがいる。」という歌詞があります。私は、いつも幼稚園で学ぶ小さな人々の中にキリストを見てきました。小さな手、小さな口、小さな体から神様があふれていきました。このような幸せな幼稚園生活を下さった神様に感謝致します。深町先生の力強く美しい讃美歌が身近で聞けなくなると思うと目頭が熱くなる思いです。

(卒園児保護者)

---

## 特集：卒業（初等部）

### 五つの約束を 胸に

6年梅組 橋本 治奈



私の初等部生活は、入学式の深町先生の、初等部の五つのやくそくについてのお話から始まりました。その約束とは、「しんせつにします、しょうじきにします、れいぎただしくします、よくかんがえています、じぶんのことはじぶんでします」の五つです。

始まってみると、楽しいことの連続で、雪の学校、平戸、洋上小学校…と、あつという間に時間が過ぎてゆきました。

三年生から六年生まで、私は、美しい音色にあこがれ、ハンドベル・クワイア部に入り、五・六年では、ろうそく消しがやりたくて宗教プロジェクト活動に参加しました。特に意識して入ったわけではありませんが、私の中でいつの間にか毎日の礼拝が心の糧となり、悪い気持ちがわき上がった時、神様の方を向かせてくれていたのだと思います。

初等部の六年間で、私はたくさんのこと学びました。しかし、こうしてふりかえってみると、最初の礼拝でうかがい、簡単そうに思えた初等部の五つの約束が、六年間かかるても完全には出来なかつたように思えます。

初等部を卒業しても毎日の礼拝を大切にし、この五つの約束を守れるように努力してゆこうと思います。

初等部は今、少しづつ建て替えられ、新しくなろうとしています。むかし、母が、当時初等部長だった伊藤朗先生から、「君たちはおまんじゅうのあんこです。建て物は皮です。皮がいくら立派でもあんこがくさつていてはだめです。」というお話をうかがつたそうです。

私もおいしいあんこでいられるよう、新たな気持ちで中等部へ進学したいと願っています。

時にはたしなめ、また暖かく見守り、支えて下さった先生方、両親、姉に感謝し、これから道を進んでゆきます。

---

## 特集：卒業（中等部）

### やった！サヨナラ 勝ちだ！優勝だ！

3年C組 鵜飼 佑



僕達野球部は中等部での最後の大会の東京都私学大会で優勝した。この大会は最後の大会ということもあり、“絶対に優勝してやる”という気迫がみんなをまとめていたような気がした。決勝戦に出られたメンバーは9人だけだったけれども、試合に出た人もベンチで待機していた人も、心はひとつにつながっているように感じた。途中いろいろなことがあったが、みんなの心がひとつになってとても嬉しかった。そのとき本当に心からこの仲間と野球ができるよかったですなと思った。試合後、朝野先生（監督）を胴上げしたら、いつもは喜びをそんなに表に出さない先生が、泣きそうになっていた。僕達の事をこんなに思つてくれたんだな、最後の最後に優勝できて本当に良かったなと思った。

僕は2年生の時から、選挙管理委員をやらせてもらっていた。選挙管理委員は年に2回ある選挙（中等部選と学友会）の企画・運営をするのが主な仕事だ。選挙前になると公示用ポスターを作成して校内に貼つたり、候補者に手順を説明したりと忙しくなるけれども、演説会、開票が終わると達成感が感じられてとてもやりがいのある仕事だった。最初は、「なんか大変そうだな」と一瞬思ったけれども、やってみてよかったですと思っている。

僕はもう中等部での生活が終わってしまう事が信じられない。入学式やオリエンテーションキャンプがついこの間だったように思えてしまう。それくらい密度の濃い毎日で、毎日がとても楽しかった。先生・先輩たちは優しく、たくさんの新しい友達もできて3年間があつという間だった。野球部、中等部生活で学んだことを高等部生活でも生かして過ごそうと思った。3年間お世話になった先生方、本当にありがとうございました。

---

## 特集：卒業（高等部）

### オルガン部に 在籍して…

3年 中 川 葉 音



私は、高等部での3年間を、オルガン部の一員として過ごしました。初等部・中等部ずっと礼拝を守り続けてきましたので、奏楽をあたり前のように聴き、讃美歌は、オルガンの演奏のテンポにただ合わせて歌つていたような気がします。しかし、高等部生になり、オルガン部員として、奏楽をさせていただく立場になり、実際に弾いてみると、意外に気をつけなければならないことが多いことに気づきました。呼吸のとり方やテンポ、さらに讃美歌には、ほかの曲とはまた異なる感覚があるようにも思いました。讃美歌を弾くことで、讃美歌のきれいな響きをそれまで以上に好きになることができたのは、もちろんですが、奏楽を通して、讃美歌に新たな発見をすることもできました。

奏楽者席からは、礼拝の一味違う面も見られました。正面の生徒席から講壇を見るのと、横に位置する奏楽者席から見るのとでは、説教をなさる先生方の見え方も違います。生徒になんとかメッセージを伝えようとする先生方の努力と情熱は、なぜか正面よりも横にいる方が、ひしひしと感じられるように思いました。説教をなさる先生方と共に礼拝をつくるお手伝いをしていると思うと、緊張はしますが、その一面、弾きながら嬉しくもあり、時には心やすらぐ時間になります。このような時間を持つことができて、本当に良かったと感謝しています。

私は、オルガンを通じて、高等部生活を楽しみ、新鮮な発見、内面の大切さを知り、感じることができました。沢山の行事に参加し、お手伝いできたことで、少ないながらも何かのお役にたてたかもしれないと思えることは、嬉しい、私のこれから自信につながっていくような気がします。高等部3年間で学ばせていただけの事を活かしながら、これかもオルガンを通して、新しい事に挑戦していきたいと思います。

3年間、ありがとうございました。

---

## 特集：卒業（短大）

### メッセージ

家政学科2年 中尾 彩子



卒業を迎える今、私は女子短大での時間がどれほど素晴らしいものだったのか、ということを改めて感じさせられています。

そのように感じる第一の理由は、キリスト教を基盤とした青山学院で学べたことです。短大での授業や礼拝、そこでの学びを通して、私の心をより豊かなものへと変えることができたと感じています。

二つ目の理由は、同盟校推薦で入学したことをきっかけに宗教活動委員会、ハンドベルクワイア、ゴスペル、聖歌隊に所属したことです。宗教活動委員会では、周りの人達の支えもあって今までにない多くの経験を積むことができました。また、ハンドベルクワイアでは、メンバー全員の気持ちを一つにして奏でる音楽の素晴らしさを、そして、ゴスペル、聖歌隊では、歌う楽しさを知ることができました。こうした一つ一つの活動によって、私の短大生活は予想以上に充実したものになり、この活動を通して出会うことのできた友達は、かけがえのないものになりました。

最後の理由に、私の短大生活を支えてくださった多くの先生方の存在があります。卒業を迎える今、私が充実した短大生活を送ることができたと感じているのも、先生方の支えがあつてこのものでした。

ここで過ごした二年間は、とても早かったけれど充実したものであり、それは私を大きく成長させました。また、ここでの学びが私の新たな希望を生み出し、編入という道を与えてくれました。私は、女子短大で得た多くの糧を活かして、新しい土地で希望を胸に頑張ろうと思います。

私を支えてくださった先生や職員のみなさま、そして友達には、感謝の気持ちでいっぱいです。

「本当に有難うございました。」

---

## 特集：卒業（大学）

### 出 会 い

国際政治経済学部 国際政治学科4年  
馬 越 嶺



「そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。わたしを尋ね求めるならば見だし、心を尽してわたしを求めるならわたしに出会うであろう、と主は言われる。」

(エレミヤ 29:12~14)

一人の人間の人生を何倍にも豊かにしてくれるもの、それは出会いだと思います。人が自分とは独立した別個の存在と接触する時、そこに出会いが生まれます。人の出会い。本、映画、音楽、絵画、場所との出会い。出会いは人に拡がりを与え、また人の心を成長させてくれます。出会いは人生を深め、生きる意味や喜びを与えてくれます。しかし人間にとつて最も大きな喜びと慰めを与えてくれる出会いとは何でしょうか。

冒頭に掲げた御言葉は、神様が私達人間に与えて下さった約束です。私達人間にとつて一番大きな出会いとは、「神との出会い」ではないでしょうか。神様はどこか遠く手の届かない存在ではなく、私達が祈ればその祈りを聞いて下さる方、そして尋ね求めるなら会って下さる方だと聖書は言っています。私達の人生には嬉しい出来事、大きな喜び、幸せな時間があります。また私達は傷つき、悩み、孤独を感じ、生きる希望を見失いそうになる事もあります。私達一人一人にとって、その時々に応じて、相応しい出会いを与えて下さる方、また私達がどんな境遇にあつたとしても、私達と出会い、共に喜び、共に泣いて下さる方、それが神様です。私にとってこの4年間は、その素晴らしい神様との絶え間ない出会いでした。最後にこれから的人生を歩んでいく上で常に心に刻んでおきたい御言葉を一つ挙げて、終わりたいと思います。

「人の心には多くの計らいがある。主の御旨のみが実現する。」

(箴言 19:21)

---

## シリーズ：キリスト教図書紹介

# 『キリスト教教父事典』

## H.クラフト著（教文館）

清水 正

---

キリスト教は現代に至るまで二千年の長い歴史をもつて いる。その信仰は聖書に基づいているが、新約聖書は使徒たちの「イエスはキリストである」という証言の文書化であると言える。ところで新約聖書が現在の数に限定されたのは、それが書かれてから百数十年後である。新約聖書が最終的に教会会議によって決定されたのは四世紀になってからである。新約聖書はその後、教会の信仰の源泉として、教会において権威ある書物「正典」としての働きを現在に至るまで保持している。

このような事情で、新約聖書の諸文書を書いた人々と、それを新約聖書としてまとめた人々は時間的に異なるのである。使徒たちの証言した諸文書を聖書として結集するためには、正しい信仰が生きていなければならない。そのような正しい信仰を明らかにするために祈り、思索し、指導した使徒以後の教会の指導者を「教父」と呼ぶのである。使徒以降、優れた教会の指導者が輩出したために、キリスト教会はローマ帝国による迫害の嵐の中を切り抜けて来たのである。新約聖書二十七巻は、これらの教父たちによる教会会議で決定されたのである。また教父たちは信仰について深く思索し、キリスト教信仰を弁明し、また信仰者としての模範的生活を殉教の死をもって示したのである。

わたしたちは新約聖書を直接手にすることが出来るが、そのことは「教父」たちの隠された存在によることを知らなければならない。新約聖書とわたしたちの間に「教父」が仲立ちとなって、聖書の正しい信仰をわたしたちのものにすることが出来るのである。

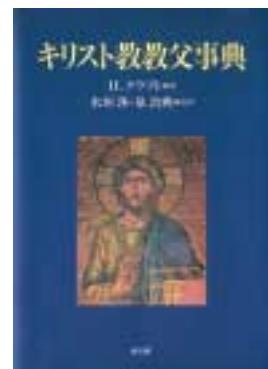
一般の人が、膨大な教父の文書を読むことは、日本ではほとんど不可能に近い。その意味で、この教父事典は推賞に値する。それには次のように記されている。「古代キリスト教思想への道案内—キリスト教の形式に決定的な影響を与えた古代の著作家たちの生涯と作品、異端や論争、教会会議の

決定など、キリスト教の基礎を知るための不可欠の事典」。これは古代教会における教父たちの活動を概括的に知るのに簡便な事典である。本文には教父の生涯と業績が述べられている。特に著作に関しては詳細に区分して記されている。例えば古代最大の教父と言われるアウグスティヌスの記述は二十頁にも及ぶ。また、教父の中で最初の殉教者と目されるアンティオキアのイグナティオスは、二世紀の前半に捕らえられ、シリアからローマへ護送されたが、その途上で七通の手紙を諸教会に宛てて書き、当時の異端的運動に対して警告を発している。またローマ教会に対して、自らの殉教の覚悟を述べ、ローマ当局に対して助命の嘆願をしないように書き送った。彼はローマで猛獣の餌食にされて殉教した。

このように本文を読むことによって、迫害の下にあった古代教会の指導者たちが、いかに努力し、死をも厭わずにキリスト教信仰を守り、深めて行ったかが分かり、とても有益である。

また巻末には、教父関連年表、文献案内、欧文一和文名対照表があり、また教父たちの著作についての欧文書名・和文書名の索引が、五十頁余に亘り詳細に記されている。更に教父たちの活動した地域の地図とその索引も付録として付けられている。

(高等部教諭)



---

# 相模原キャンパスのキリスト教活動を振り返って

## － 地の塩 世の光として －

大 島 力

---

2003年4月に、ついに相模原キャンパスが開学し、はや一年が経とうとしています。これまで青山学院大学は二つの新しいキャンパスを開設しました。1965年の世田谷キャンパス、1982年の厚木キャンパスです。世田谷キャンパスは理工学部のためのものでしたので、一度も足を運ばずに卒業していった人も多いことでしょう。しかし、その38年の歴史は青山学院大学にとって極めて重要であり、かつ独自の意味をもっていたと思います。それはキリスト教活動にとても言うことができます。私は世田谷キャンパス・理工学部担当の宗教主任として1996年に就任し、その後の数年間を歩んできたので、特にそのことを思います。広い講堂を兼ねた礼拝堂は、礼拝を守る上でも、また教会音楽の上でも、必ずしも条件が良いとは言えませんでした。しかし、そこで守られる礼拝には、理工学部の独自の気風というものがあり、今となっては懐かしく思い起こされます。

他方、厚木キャンパスは21年の歴史で、決して大学のキャンパスとしては長くない歩みでした。しかし、そこには大学一年、二年生の若いエネルギーが満ちていました。厚木のチャペルには、現在は相模原キャンパスの礼拝堂に設置されているパイプオルガンがあり、礼拝も特にチャペル・ウィークの時などは、多数の学生であふれています。そして、その勢いは現在の相模原のチャペルに引き継がれています。そのような、それぞれ独自の特徴をもっていた礼拝堂がいわば合体して、この一年の礼拝が前期・後期と守られてきました。そこでこの一年を振り返って、そのチャペルを中心として展開してきたキリスト教活動について記してみたいと思います。

### 生き生きとした礼拝

4月12日（土）に初めての礼拝がもたれ、14日（月）には「新入生歓迎礼拝」が行われました。約300名の出席者があり、相模原キャンパスの新しい「ウェスレー・チャペル」としての良い出発がなされました。その後も礼拝出席者は多く、200名前後の礼拝が珍しくなく、パイプオルガンに適した設計の礼拝堂

という好条件もあって、新しいキャンパスにふさわしい礼拝が守られ始めました。時間帯は1時限と2時限の間の30分間という限られた時間ですが、月曜から土曜日まで毎日、テンポの良い進行と授業への移動時間も考慮を入れた、短めではあるがポイントが絞られたメッセージが語られて来ました。そしてこのことは一年を通じて基本的に変わることなく、前期と後期あわせて140回の礼拝がもたれ、出席者の延べ人数では、かつての厚木キャンパスの礼拝と世田谷キャンパスの礼拝を合わせた出席人数を4000人も超える学生・教職員が礼拝に出席しました。この恵みにまず感謝したいと思います。そして、新年度多くの学生たちが足を運び、魅力ある礼拝がもたれることを期待しています。

大学の学事暦には、前期と後期にチャペル・ウィークという特別な礼拝がもたれる週が明記されていますが、相模原キャンパスでも5月19日～24日と10月20日～25日に12回の礼拝がもたれました。社会の各分野でよい働きをしておられるクリスチヤンのメッセージは、とりわけ学生たちに強い印象を与え刺激になっています。2003年度という相模原キャンパスの最初の年も同様でした。そして、多い時には500名近い出席者があり、平均でも290名の学生・教職員がこれに参加しました。このことは、近年の二つのキャンパスでは、おそらくなかつことであろうと思います。それだけ、チャペル・ウィークは重要であり、今後も新しいキャンパスに様々な分野で活躍しているクリスチヤンをお呼びし、信仰の生きた証を伺いたいと思っています。

### 活用されるチャペル・ラウンジ

さて、学内のキリスト教活動は礼拝を中心としていますが、それに留まるものではありません。聖歌隊、ハンドベル・クワイア、青山キリスト教学生会（ACF）の活動があります。また、宗教主任による聖書研究会、クリスチヤン教員によるフォーカス・グループも、相模原のチャペル内の集会室でなされていま

す。そのような様々な活動がなされているので、特にお昼前後の集会室は極めて有効に使用されて来たと言えるでしょう。時には、部屋を確保するのが難しいということもありました。そういう中で特筆すべきことは、礼拝堂の横に設けられているラウンジのことです。設計段階から、チャペル内に礼拝堂以外の自由なスペースを十分に確保する必要があると考えていました。そこは、いつでも誰でも出入りできる所で、学生たちが食事をしたり、ゆっくりと寛いでいられる「居場所」となるようにと計画していました。現在、礼拝堂横のラウンジはまさにその役割を果たしています。その意味では、チャペル全体の設計は成功したと言えます。いや、もう少し、ラウンジが広ければ良かつたという声さえ聞こえてきています。

チャペルは決して礼拝堂としての機能をもっていれば良いというものではありません。そこに集まる人々の出会いの場所であり、宗教センターに関するグループ同士の交流の場であり、さらには、一般の学生が気軽に入って来て、キリスト教活動の一端に自然な形で触れ得る場所もあります。そのようなことが、実際の光景として見られたのが、この一年でした。このことは、厚木キャンパスでも世田谷キャンパスでもなかつたことでした。やはり、人間の活動を活性化するには、それなりの器（建物とスペース）が必要であることを実感させられました。そしてこのラウンジの活用は、今後のチャペルを中心としたキリスト教活動にとって、豊かな可能性を開くものだと思います。

### 多彩な特別行事

さて、新キャンパス開学を記念して、礼拝堂において特別な行事が多くなされました。このことは今年度に限ったことですが、やはり今後のキリスト教活動にとって重要な意味をもっています。6月5日(木)にはノーベル経済学賞受賞者のジェームズ・マーリーズ教授(ケンブリッジ大学)の講演会があり、学外から多くの参加者がありました。また、10月から12月にかけて、歌手・沢知恵さんのコンサート、前日銀総裁の速水優氏の講演会、さらにオックスフォード大学ニューカレッジ聖歌隊のコンサートが行われました。このような多彩な方々をチャペルに迎えることができたのは、光栄としか言いようがありません。

また、忘れてはならないのは第一回相模原祭のことです。10月11日(土)、12日(日)に行われ、初日の午前には礼拝堂において開会礼拝が行われました。そして、同日午後の、聖歌隊、ハンドベル・クワイア、ACFの各コンサートおよび催しものには、

学生のみならず実に多くの地域の方々が参加されました。このことは「地域に開かれた大学」という点においても、また、学内のキリスト教活動が相模原の地域に知られるという点においても意義深いことであったと思います。今後、色々な工夫をして相模原祭における多方面の可能性を探っていくべきでしょう。

### 相模原でのクリスマス

最後に、相模原キャンパスにおける最初のアドヴェント、そしてクリスマスの様子について述べたいと思います。まず、11月28日(金)には、クリスマス・ツリー点火祭が行われました。この日は雨の予報が出ていたのですが、幸いに予報がはずれ、講義棟に囲まれた広いスクエアで、ツリーを前にして行うことができました。チャペルのバルコニーに司会者等が立ち、聖歌隊やハンドベルはチャペルを背にして歌い演奏しました。地域の方々も含めて学生・教職員が3500名参加し、厚木や世田谷では想像できない思いを超えた行事となりました。今後とも相模原キャンパスの最も規模の大きなキリスト教行事として定着していくことが望れます。また、午後の授業時間を少し短縮して、12月19日(金)の夕刻にクリスマス礼拝が行われました。1時間15分の本格的な礼拝で、聖歌隊、ハンドベル、そして外部からお招きした説教者による深く心にしみるクリスマスマッセージなど、良い礼拝がもたれました。やはり、学内においてもキリスト教への関心と興味が最も大きくなるこの時期に、本学の建学の精神により多くの学生に、また教職員に触れてもらうために、祈りと知恵を働かせてキリスト教活動を積極的に展開していくことが必要だと思われます。また、同じキャンパス内にある女子寮「スクーンメーカー寮」においても、年間を通じて礼拝がもたれ、独自にクリスマス礼拝が行われていることも、心に覚えたいと思います。

本学院のスクール・モットーは「地の塩 世の光」です。学院の創設者一人であるドーラ・E・スクーンメーカーは、明治初期に日本に宣教師として来て、まさに「キリストの光」を暗き世に照らした人です。その精神を受け継いでいく相模原キャンパスであります。キャンパスの正門から入って少し進んだ右手のF棟のアーチには、ラテン語で「地の塩 世の光」と刻まれています。そのことを実質化していくキャンパス、教育・研究共同体として歩んでいきたいというのが私たちの願いであり志です。

(大学宗教主任)

# 青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その6

## －キリスト教機関紙『護教』『福音新報』－

氣賀健生

青山学院資料センター所蔵の貴重文献・史料紹介第6回。今回は明治期以来のキリスト教定期刊行機関紙のうち『護教』『福音新報』を御紹介します。

まず『護教』。メソジスト教会の指導者本多庸一は、早い時期から、少数派のキリスト教がこの狭い日本で各宗派にわかれても伝道することは賢明でないと考えていました。明治40年、メソジスト三派（アメリカ北部メソジスト教会・アメリカ南部メソジスト教会・カナダメソジスト教会）が合同して日本メソヂスト教会が成立し、本多庸一はその初代監督となります。彼は明治24年という早い時期から既に将来の三派合同を構想し、メソジスト派共通の機関紙として『護教』を発行します。初代の主筆（編集長）には当時辛口の評論で鳴らしていた山路愛山が本多の招きに応じて就任しました。山路は狷介にして不羈奔放という一筋縄ではゆかない人物でしたが、本多には心服していましたということです。

こうして出発したのがメソジスト三派の共通機関紙としての週刊『護教』であって、のち三派合同の時に大きな役割を果すことになります。『護教』は初期の日本キリスト教界の実情を知るためにまたとない貴重な文献であり、当時の息吹を感じさせる論調に溢れています。青山学院資料センターにはこれがかなり揃っていましたが、若干の欠号がありました。筆者は約20年前に、関西学院資料室に呼びかけ、両者の欠号を相互に補充し合い、現関西学院長山内一郎氏、現姫路教会牧師田添禱雄氏の御協力によって、ほぼ欠号を埋めることができました。然しあくまでも若干の欠号が残りました。筆者は当時東京女子大学を始め可能な限りの努力をして捜しまわりましたが、青山学院、関西学院の互換による整備を上まわるものには発見できませんでした。そこで一計を案じて三、四代続いているクリスチヤンの地方素封家を当つてみました。

弘前近郊藤崎村で本多庸一から直接薰陶を受けた家系を訪ねたところ「ここらでは新聞紙類はみんなリンゴの袋かけにし

てしまうのでねエ」という返事。長崎は本多庸一終焉の地で早くからメソジスト教会のひらけた土地、ということで聊かの期待を抱いて訪ねたところ、原爆ですべて失った、とのこと。そのことに思い至らなかった己れの迂闊を恥じた次第でした。ともあれ、現存する限りでは『護教』は青山学院資料センターに最もよく揃っていることは間違ひありません。

山路愛山主筆時代の12～15号が欠けているが、明治24年7月7日付の創刊号だけは現存しています。この年1891年はジョン・ウェスレー没後100年に当り、その式典の模様がこの創刊号に載っています。

「ウェスレイイ百年祭は左の如く施行せらるべし、  
麻布鳥居坂町八番地麻布教会、演説者監督グード  
セル氏、コレル氏、本多庸一氏、イビー氏、  
司会平岩愷保氏」

16号からは揃っていますが、その16号の冒頭の論説には「基督教の成功及び其原因」とあります。社説の最後は明治時代を彷彿とさせる次の言葉で終っています。「滔々たる世潮斯の如し…誰か風を移し俗を易ふるを以て自ら任ずる者ぞ。此任重くして此道遠し噫！」

欠号は次の通りです。2～15号、51、52、57、72、73、94、105、108号。そして125号～295号（明治26年11月～明治30年）が欠号です。



大正4年1月15日号に次の公告が載っています。

「社告、次号の一部を伝道用といたします。護教社」そして大正4年1月22日1225号から『伝道』第1号が本紙『護教』の附録として、爾後毎月1回第一金曜日に求道者の手引きの役割を果しました。この『伝道』は60号(大正8年12月18日)『護教』1478号で終っています。

『護教』はその後次のようにしばしばタイトルをかえています。その理由は今のところ判っていません。

『教界時報』大正9年1月1日付1479号から。

『日本基督教新聞』昭和10年1月1日号から。なおこの号に「日本の基督教徒29萬に達す」とあります。

『日本メソヂスト時報』昭和11年4月17日付2294号から。そしてこの『日本メソヂスト時報』は、昭和17年1月29日付2578号を以て終刊となります。その前年即ち昭和16年11月24日に、日本基督教団が成立し、メソジスト教会そのものが終焉を迎えたので、その機関紙も命脈がつきたということです。

この時『日本メソヂスト時報』は、併行して発行されていた「基督教世界」及び「基督教報」と合併し、昭和17年2月5日付2579号から新たに「基督教世界」として、成立したばかりの日本基督教団第二、三、四部の機関紙として出発しますが、これは昭和17年9月24日付2610号で廃刊となります。そして、「福音新報」・「るうてる」と合併して(後述)出版を続けるのですが、昭和19年4月11日号に「都合により次号から当分の間休刊」と公告を出し、事実上終刊となります。理由はキリスト教に対する政府・軍部の圧力、そして用紙の配給が途絶えがちで出版事情が悪化したためがありました。

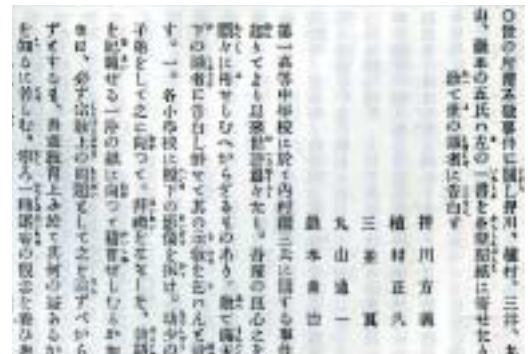
さて、『護教』関係はこの位にして次は『福音新報』。これは今更ここに詳しい説明を必要とすることはないでしょう。植村正久等、明治期の鉅々たるキリスト教界の論客が筆陣をはつた週刊紙です。これは当初『福音週報』として明治23年3月14日に創刊されました。この福音週報には、例えば国家觀を論じて「国家に於ける基督教」と題する論説が連載されたり、或いは「社会主義の精神」という論説では「昔の暴君は刀を以て人を殺し、今の資本家は貴銀を以て人を殺す」などという議論が堂々と述べられていました。そこにおこったのが、例の内村鑑三の不敬事件でした。明治24年2月20日付第50号では早速「不敬罪と基督教」なる一文が冒頭論説を占め、次の51号(2月27日)では「敢て世の識者に告白す」と題して「不敬

罪なる語を弄して…」世の人に過ぎない天皇を神格化している、と堂々反駁文を掲載しました。署名人には、押川方義、植村正久、三並良、丸山通一、巖本善治等、当代一流のキリスト教界人が並んでいました。そしてこの号の末尾には「官命により福音週報の発行は終りとなる」旨が公告されます。然し早くも一ヶ月後、タイトルを『福音新報』として明治24年3月20日に発刊されます。そして歳を重ねること5年目、220号(明治28年6月6日)には「発行を止むるの命令書、突然内務大臣より下れり。甚だ遺憾千萬也」との公告を残して廃刊となります。明治28年といえば既に日清戦争2年目です。『福音新報』は内村鑑三はじめ非戦論者の牙城と見做されたのでしょうか。然しぱ月を経過後、早くも『福音新報』は再発行されるのです。然も堂々と同じ『福音新報』を名乗って、改めてその第一巻第一号となっています。然しその明治28年7月5日号は、巻頭の1頁のあと3頁まで欠落し、4頁からです。本資料センター所蔵本だけのことであれば、何のことはない逸失ですが、場合が場合ですから、今後の調査の対象としたいと思います。

この『福音新報』は、その後メソヂスト系の機関紙と合併(前述)し、『日本基督教新報』として、明治23年の創刊から数えて2425号を昭和17年10月15日に第一巻第一号として出版します。これは10月8日に出版の予定でしたが、認可が中々おりず、1週間おくれた、という事情がここでもみられます。然し当時としてはキリスト教界唯一の機関紙となった『日本基督教新報』も、既述の通り昭和19年4月27日を以て終刊となります。創刊から数えて2491号でした。この『福音新報』は当資料センターにほぼ完全に揃えています。

(今回は年代を西暦=世界暦でなく、日本の年号を用いましたが、内容から理解し易さを優先しました。)

(大学名誉教授)



## シリーズ：私の教会

# 日本聖公会 林間聖バルナバ教会

横山道行

小田急江ノ島線・東林間駅から歩いて15分ほどのところに私の通う林間聖バルナバ教会があります。

この教会は、1964年に「日本聖公会林間伝道所」として開設され、相模原地域を中心としたキリスト教の宣教が始まり、翌年「林間聖バルナバ教会」となりました。

この林間聖バルナバ教会は、「聖公会」に所属する教会です。聖公会は、16世紀にローマ・カトリック教会から独立したイギリスの国教会（英國聖公会）を母体として全世界に広められた教会で、日本に伝えられたのは、1859(安政6)年アメリカ聖公会の二人の宣教師によるものでした。

その後、宣教師や日本人伝道者により、全国各地に300余の教会が建てられただけでなく、教育・医療・福祉にも力を注ぎ、立教学院、国際聖ルカ病院など200余の施設と働きをもって貢献しています。日本初のハンセン氏病救済事業や養老院を始めたのも聖公会の人達でした。

聖公会は、カトリックの教義と礼拝を大切に伝承し、併せてプロテスタントの宗教改革の精神と神学を持ち、教会再一致の運動にも貢献しながら、神様の救いを伝えています。

現在、バルナバ教会は小林司祭が担当されています。小林先生との出会いは、私が立教学院諸聖徒礼拝堂のハンドベルクワイアに所属していたときでした。温かいお人柄に学生は親しみをこめて「コバチャップ（小林チャプレン）」と呼んでいました。小林先生を訪ねて、バルナバにやって来る卒業生はあとを絶ちません。私もその一人です。

大学卒業後、私は企業に勤めることになりました。一流の企業で働くということは、やりがいがある一

方で精神的、肉体的な犠牲も伴うことがあります。そのような中で、林間聖バルナバ教会は安らげる場所でした。陽の先が差し込む礼拝堂で祈る時が与えられることは、本当に素晴らしいことだと実感しました。

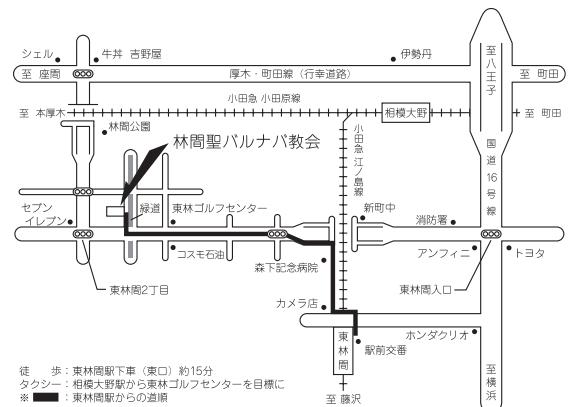
さらに、教会員の皆さんは明るく、気さくな人達が大変多いです。また、お話好きな方も多くいらっしゃいます。愛餐会の時には、皆さんマイクを片手に様々なお話を下さいます。楽しい話に耳を傾けていると、時間がすぐに過ぎてしまいます。

現在、私は神奈川県から引っ越し、埼玉県に住んでいます。バルナバ教会へは、片道二時間の道のりです。日曜日の朝、電車に揺られながら読書などを東林間駅へと向かいます。

確かに物理的に遠い場所にあるのですが、バルナバ教会は常に私の心にあります。神さまはもちろんのこと、小林先生を始め、教会員の皆さんとの温かい気持ちに支えられています。

ぜひ、お近くにお立寄の際には、林間聖バルナバ教会にいらして下さい。お待ちしております。

(中等部教諭)



# 宗教センターだより

## 幼稚園より

4月に入園した3歳児。何もかも初めてだった幼稚園も今ではすっかりと「自分の場所」となり、「おはよう!」と元気よく登園し、友だちと笑い合いながら、遊ぶようになりました。

4歳児。たくさん遊ぶ中で、時に友だちと意見がぶつかることもありますながら、遊ぶ喜び、人とともにいる喜びをいっぱいに感じました。

5歳児。日々の生活の中で、また軽井沢キャンプやクリスマスページントを通して、お互いの「よさ」を見つけて仲間となっていました。そして、その全てを守り、導いて成長させて下さった神様に感謝をして、卒園していきます。3月12日の卒園式では、子どもたち1人1人に卒園証書が手渡されます。

新年度も、「信頼・喜び・感謝」の保育目標を土台とし、期待と希望をもって、また新たな1歩を踏み出していかれるように、準備をしていきたいと思います。

(教諭 久 洋子)

## 初等部より

### ○宗教委員退修会 2月13日(金)～14日(土)

初等部キリスト教教育の一年を反省し、新年度の計画を立てる大切な会です。

### ○卒業礼拝 3月5日(金)

6年間、毎日礼拝を守った礼拝堂で、心を込めてささげます。説教者は、小澤淳一宗教主任。

### ○6年生を送る礼拝 3月8日(月)

6年生から、それぞれの学年に御言葉と「友情の火」と呼ばれるろうそくのひかりをくり、各学年が御言葉で答える礼拝。

説教者は長瀬 茂先生。

(宗教主任 小澤 淳一)

## 中等部より

クリスマス礼拝献金は、11月の中等部祭の時の食堂や古本市の売上げ、保護者聖書の会で毎回捧げている献金を合わせ、クリスマス礼拝で捧げました。

献金は次の34団体にお送りしました。

1) 学校、神学校－東京神学大学、日本聖書神学校、

農村伝道神学校。

- 2) 海外で活動するNGO－日本キリスト教海外医療協力会 (JOCS)、国際精神里親運動部 (CCWA)、アジアキリスト教教育基金 (ACEF)、東京レインボーハウス (国内外交通・災害遭難救済) ペシャワール会
- 3) 児童・老人養護－救世軍恵泉ホーム、光の子供の家、バット博士記念ホーム、愛隣会 (総合)、日本キリスト教社会事業同盟、日本キリスト教奉仕団、砂町友愛園、止揚学園、聖坂養護学校、愛の泉 (総合)、泉会、久山療育園、エリザベス・サンダースホーム、深川愛隣学園
- 4) 教会－教団教育委員会、教団年金局、引退教職老人ホーム、会津若松教会、日本キリスト教協議会 (NCC)
- 5) その他－日本キリスト教救らい協会、好善社、日本盲人キリスト教伝道協議会、いのちの電話、キリスト教メンタル・ケアセンター (CMCC)、日本聖書協会

(宗教主任 石丸 泰樹)

## 高等部より

### ○クリスマス礼拝

高等部では12月18日にクリスマス礼拝を行いました。第1部の礼拝では、経堂緑岡教会の松本敏之牧師が腹話術の人形を用いて、ブラジルのクリスマスから感銘深いお話を下さいました。

第2部の祝会は今年初めてゴスペルコンサートを計画しました。少しでも本場のゴスペルをと願い、日本におけるゴスペルの第一人者ラニー・ラッカー氏とラニー・ラッカーゴスペルミニストリーの方々に来ていただきました。

ゴスペルをはじめて聞く人も多く、心から賛美する歌声に驚くと共に、賛美歌の多様さを実感させられた祝会でした。

### ○クリスマス献金

生徒、保護者 (保護者聖書の会出席者含む)、教職員、同窓会クリスマス会出席者の方々によって捧げられた献金合計は、1,305,865円でした。

アジアキリスト教教育基金 (ACEF)、国際精神里親運動部 (CCWA) 他、20の団体と卒業生伝道者14名に贈ることが出来ました。

(宗教主任 坂上 三男)

## 短大より

### ○クリスマス礼拝 12月10日(水)

宣教師・大学宗教主任の鈴木有郷先生をお迎えし「光は暗闇の中で輝いている」と題してお話をいただきました。旧約聖書イザヤ書を日本語や英語の他に専攻基督教養専攻のタバダ・ルーシーリンさんがタガログ語(ピリピーノ)で、また林筱薇さんが中国語で朗読しました。出席者695名。

### ○クリスマス祝会 12月17日(水)

宗教活動センター主催の祝会を音楽室で行い、教養学科の足立康先生が短くお話をされました。大学のACFの皆さんも出席し、親睦を深めました。

出席者は約70名。

### ○クリスマス・コンサート 12月19日(金)

出演は短大聖歌隊、ハンドベル・クワイア、ゴスペルグループ。今回で3回目のチャリティーコンサートでした。ハンドベル指揮は田中幸子先生、オルガンは佐々木順子先生、指揮は渡辺善忠先生。

出席者50名。

### ○クリスマス献金報告 366, 858円

アジア学院や興望館沓掛学荘など6団体にお届けしました。

### ○天城冬の集い 1月31日(土)～2月2日(月)

伊豆天城山荘で「平和を実現する人々は」というテーマで行いました。主日礼拝説教は大学宗教主任の嶋田順好先生、発題講師は国文学科の鹿倉秀典先生でした。日本文学の中における「戦争」「平和」「愛」という日本語をよく見つめ、平和の重要性について話しました。参加学生15名、教職員12名。

### ○卒業礼拝 3月22日(月)

青学講堂で、伊藤勝啓先生が「起きよ光を放て」と題してお話をされます。礼拝後に送別会を行います。

(短大宗教活動センター職員 向野 理恵子)

## 編集後記

創立130年の青山学院にとって、2003年度は相模原キャンパス開校の歴史的な年でしたが、新キャンパスにおいてもキリスト教に基づく教育が脈々と継承されていることが紹介されています。今回は「卒業」特集号ですが、本学の幼稚園から大学に至るまでの各部を卒業される学生、保護者、教師のエッセイの全てに本学で無ければ得られない数々の貴重な体験、本学の教師であるが故に学生から与えられた真理の恵みも紹介されています。

## 大学より

### ○2003年度クリスマス献金

総額 1, 227, 987円

献金先 バット博士記念ホーム・財団法人PHD協会・  
暁の家・Rondalla on wheels

### ○第二部スプリング・カレッジ 2月7日(土)、8日(日)

於：御殿場 YMCA東山荘

「I have a Dream－人間の人間らしさを求めて－」

講師 鈴木 有郷(宣教師・大学宗教主任)

参加学生 17名 教職員 8名

### ○卒業礼拝 3月27日(土) 10:00

於：ガウチャー記念礼拝堂

説教「平和の入場行進」

東方 敬信(大学宗教部長)

(宗教センター事務室 田中 健夫)

## 本部より

### ○Art・クリスマス・Aoyama

11月26日(水)～12月16日(火)

出品 幼稚園 1点

初等部 19点

中等部 20点

女子短大 34点

大學 9点

他に渡辺禎雄氏の版画3点

於：女子短大ギャラリー他

### ○教職員新年礼拝 1月7日(水)

於：ガウチャー記念礼拝堂

説教「Congratulations！」

鈴木有郷(宣教師・大学宗教主任)

出席者 225名

(宗教センター事務室 田中 健夫)

## Wesley Hall News 第79号

発行 青山学院宗教センター 宗教部長 東方 敬信  
東京都渋谷区渋谷4-4-25

TEL.03-3409-6537(ダイヤルイン)

URL <http://www.cc.aoyama.ac.jp/user/agcac/>

E-mail.agcac@cc.aoyama.ac.jp

編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会

印刷 万全社